流れる日々

てんのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流れる日々

【Ｎコード】
Ｎ１４８７Ｗ

【作者名】
てんのすけ

【あらすじ】
幼いころの約束を覚えている人は実際にどれほどいるのか。
そんな言葉から始まる、大学のある温泉サークルを舞台にした恋愛ものです。

（前書き）

こちらの作品は、私が昨年の夏コミに出展した作品を加筆修正したものです。
どうぞ、よろしくお願いします。

幼いころの約束を本気にする人なんて実際にいるのだろうか。
どんな些細なことでもいい。結婚しようとか、大きくなったら恋人になる、とか。それを本気にして実行しようとする人なんて本当にいるのだろうか？
そんな話はゲームやアニメでしか考えられない、そう俺は考えていた。
なぜならば、約束した人とずっと一緒にいられるわけではないし、その約束を一字一句完璧に覚えていることなんて正直難しい。そして何より、子供の時に交わした約束の大半はその場のノリだ。真面目にとらえる方がバカらしい。
でも、俺はそんな考えられないことを成し遂げてしまった。
某有名大学への入学。
それは、俺が彼女と交わした幼いころの約束だった。
大学の入学云々の他にも、何か彼女はそっぽを向いてぼそぼそと言っていたような気がするけど……残念ながら忘れてしまった。
そして、正直なところ幼いころに交わした約束というのは今を思えば後付けに等しい。
本音を言えば、この大学に入学できれば念願の一人暮らしができるから頑張ったようなものだ。
親との同居を続けて十代後半になれば、一人の空間というものに憧れを抱くし、何かに解き放たれ、自由になれる気がしたのだ。今でも十分自由なのに何に解き放たれたかったのかは正直なところ分からないが。
本音は別にあったけど、結果的には約束は守ることができた俺。
約束を交わした彼女とはもう会っていないし、今は名前も忘れてしまい、愛称として呼んでいたふーちゃんという呼び名しか覚えていない。

それでも彼女の持っていた雰囲気だけは今でも忘れられない。
整った顔立ちに、厳しげに細められた目。全体的にすらっとした体型。長くのばされた髪の毛は、育ちの良さを示しているのか、艶やかでよく手入れがされてある印象を受ける。そして、いつも決まって上品な作りのフリフリな洋服を着ていた。彼女は幼いころでも十分に美人だったから、成長した今ならもっと美人になっているに違いない。
そんな彼女とは、彼女の親の仕事の都合で他県に引っ越すことになり、疎遠になった。
確か、彼女と別れる間際に、俺は彼女となぜか大学に入る約束を交わした。
なぜその大学に入るのか、どうしてそんな約束をしたのかは忘れた。成長してから考えてみても思い出せなかったし、考え付かなかった。答えを知るには、約束を交わした彼女に聞いてみるか、幼き頃の俺自身に聞いてみるしかないと思う。
とにかく、無事に大学生になった俺はこれから、憧れのキャンパスライフを送ることになる。約束の彼女がいるかどうかは分からないし、いたとしても彼女が約束を覚えているのかも分からない。
それでも、俺が積み上げてきたものは変わるわけではないし、崩れることもない。彼女がいなくても入学できたことは変わりないのだから、楽しまなきゃ絶対に損だ。
講義はもちろんのこと、サークルにバイト、やりたい事や興味のあることはいっぱいにある。
一度しかない大学生活。精一杯楽しまなきゃ損だからな。

「貴方、もういらないわ。つまらないもの」
「そんな、僕が、つまらない……？」

俺の目の前で展開されている別れ話。
切り出しているのは女性で、ショックを隠せない様子の男性。男性の方は信じられないといった表情で固まっている。
実際、男性は辛く評価をしても容姿の整った部類に入っているし、背も高く、引き締まった体から運動もかなりできると推察できる。
男の誰しもが欲しがるものをすべて持っている男性。
彼は俗に言う、イケメンだ。
しかし、そんなイケメンな彼があっさりと振られようとしているのだ。
凡人の俺には振ろうとしている彼女の気持ちが全く理解できない。
「失笑してしまうくらいに退屈な時間を過ごしたことってある？私はあるわ。貴方と会っていた時間、全てが失笑してしまうぐらいに退屈だったもの。付き合っていて退屈なら付き合う意味がないじゃない。これからはお互いに有意義な時間を過ごしたいでしょう？」
辛辣な言葉を彼に向って吐きだす彼女。彼は彼女の言葉の一つ一つに傷ついているようで、顔を下げ、表情を曇らせている。
そして、そんな彼の様子を見て彼女は唇を意地悪気につり上げた。
「今現在話していても欠伸が出そう。本当に退屈で、何より不愉快だわ。とっとと消えてくださる？」
最後に、誰しもが怯んでしまいそうなくらいに鋭く睨んで威嚇をする彼女。どうやら男は完全にノックアウトされてしまったようで、足早にその場から居なくなってしまった。
あぁ、イケメンくん。可哀想に。でも、大丈夫。君なら次があるさ。
……君が女性不審になってなかったらな。
残るのはその様子を見守っていた俺と、辛辣な言葉と威嚇で男を無残に振ってしまった彼女のみ。
彼女は恐ろしいまでに整った顔を俺に向けると、先ほどの男に向けたものとは違う、どこかいたずらっ子の雰囲気のある笑みを俺に向けた。

「勿体ない、貴方はそう思っているのでしょう？　でも残念。それを決めるのは私だわ」
　別にそんなことを思っちゃいません。先輩の性格の悪さに改めてドン引いているところです。
「別に。そんなこと思っちゃいませんよ」
　俺の言葉に彼女は気分を害したのか、俺を睨みつけ、頬を若干膨らませて不機嫌全開といった表情になった。
　うわ、メンドクせぇ。
「何よ、その反応。全然面白くないわ。貴方が見せる反応が面白いからパパの紹介してきた男を振ったのに」
　おいおい、そんな理由であんな可哀想な振り方をしたのかよ。イケメン君がこの場に居なくてよかったなぁ。聞いてたら女性不審は確実だぞ。
　だけど、俺にはどうしてか悪女極まりないはずであるこの先輩が悪人には思えなかった。
　容赦なく毒を吐くし、性格がねじ曲がっている。だけど、その全てが無理をしているような、そんな感じがするから。
　今の性格を自らの意思で作っているような感じに見えるんだよな。
　まぁ、全部男のカンってやつだから信憑性には欠けるのだけれど。
「不細工と美人は三日で慣れます。それと同じで、性格がいくら個性的な人でも、結局慣れれば淡白な反応しかできなくなるもんなんですよ」
　俺の苦笑交じりの答えが彼女はお気に召さなかったようで、心底つまらなそうにため息をついた後、後ろをくるりと向いた。相当にムカついたらしい。
「もういいわ。本当につまらない」
　彼女は不機嫌そうに肩を揺らしながら去って行った。彼女が去った後に俺はぽつりとつぶやいてしまった。
「美人は不機嫌になると怖いねぇ……」
　美人がキレると非常に迫力がある。整った顔に睨まれるというの

はなかなかにキツイものがある。
　先輩以外にも美人に凄まれたことはあるが、ちびりそうになったし。
「でも、どんなに意地悪を言われても、滅茶苦茶に睨まれたとしても先輩のこと、嫌いになれないんだよな……」
　別にドMってわけではない。……ややMかもしれないけれど、無茶苦茶な人は正直苦手だし、極力近づかないようにしている。それでも、先輩と接点を持ってしまうのは心のどこかで先輩を気に入っているのかもしれない。
「それに何かキャラが、ふーちゃんとかぶるし」
　無茶苦茶な約束を交わした例のふーちゃんにびっくりするくらいにそっくりなのだ。
　先輩の纏うオーラや雰囲気が。
　そして、なんというか漫画やアニメでしか考えられないようなお嬢様が、現実世界に飛び出てきたっていうくらいお嬢様な性格とかが。
「どうしたもんかね」
　一人になった俺は、苦笑交じりにため息をついた。

　ふーちゃんにそっくりな蓮田風音（はすだかざね）先輩と出会ったのは、大学入学の際に行われたサークルの勧誘会だった。　残念なことに、俺にはこの大学に通っている知り合いの先輩なんて人はいなかった。だから、当てもなく適当にキャンパスを歩いていたのだった。
　あの時に限って、同じ大学に合格した幼馴染の向日葵（ひまわり）は風邪で寝込んでいたし。
　適当に歩きながらもしつこい勧誘に四苦八苦している、その時だった。

俺の視界にはある看板が入ってきた。
その看板は、やけにポップな感じが前面に押し出されているかわいらしいもので、非常に派手だった。
だから俺の目に留まったのかもしれない。
「温泉サークル？」
看板には可愛らしい文字で温泉サークルとあった。可愛らしくても温泉というのはどことなくおばさんっぽいような気がする。
「温泉って。おばさんかよ。入るひとなんているのか？」
「あら、私は入会しているし、おばさんじゃなくても行くでしょう？　温泉」
俺の小さなぼやきに、誰かが心外だと言わんばかりに反応してきた。振り向くと、そこにはどえらい美人がいた。そこらにいるアイドルが泣いて逃げ出すようなそんな美人。黒髪をショートにしていて、やや厳しげに細められた瞳は、彼女の性格を表しているかのようだ。俺のボキャブラリーが貧困なだけかもしれないが、彼女を表す言葉は美人しかないように思う。
そんな彼女だったから、俺は思わず見とれてしまった。
そして、見とれているうちに彼女は俺に近づいており、俺を舐めまわすように見ていた。
何なんだ、この人。
「もしかして、貴方……」
彼女は俺を眺めまわすのをやめ、口に手をやって考え込んでしまった。ちょっと無表情な彼女の瞳は、何かを必死に堪えているようにも見えた。
「貴方、名前は？」
「あ、荻条（おぎじょう）です。荻条流（おぎじょうりゅう）。この大学の人文学部に入学したばっかの一年です」
「荻条、流」
彼女はゆっくりとかみしめるように俺の名前を口に出して言うと、わずかだが、微笑んだ。

その時、時が止まったような錯覚に俺は陥った。
騒がしい周りの喧騒も、動き回るたくさんの人たちも全て魔法か何かがかかったみたいにぴたりと止まった。
そんな止まった世界で俺が見たのは、どうしようもない幻覚を起こすくらい彼女の微笑みで、それはとても魅力的で、綺麗だった。
どんな形容でも追いつかないような綺麗さ。
ただ、綺麗だと言うしかなくなるというのはこのことだろう。
そんな彼女に導かれるように、俺は彼女に勧められるままに、おばさん臭いとしか思えなかった温泉サークルに入会してしまった。
それぐらい彼女は魅力的だった。
だけど、それは俺がのちのち後悔することになるなんて予測し得なかったからだと、今になって強く思う。そうじゃなかったら絶対入らなかった。
彼女があまりにも無茶苦茶で、普通の人とは全然違うんだってことがあとあとになってようやく分かったからな。

蓮田風音（はすだかざね）。
それが彼女の名前だ。
彼女は医学部の二年生に在籍していて、非常に優秀な学生とのこと。容姿端麗、才色兼備。まさに非の打ちどころのない完璧な女性。
その上、実家はメディアに取り上げられることの多い有名な病院を経営。同じ宇宙船地球号の仲間だとは思えないな。
「それに、なんというか俺にはやたらサドっ気たっぷりというか。スゴイ冷たい気がするんですよね」
「あはは。風音はちょっと気難しいところがあるからねぇ。それでも、リューくんのことはお気に入りだと思うけどな」
今は、学食の片隅でサークルの集まりをしている。

サークルといっても人数はものすごく少ない。会長の西野朱里（にしのしゅり）さんに、風音さん、俺に、もう一人の四人だけだし。

そして、このサークルの集まりも授業の関係とかで今は俺と朱里さんしか集まっていない。

向かい合って俺と話している朱里さんは正直、パッと見は小学生の高学年か中学生にしか見えない。いわゆるロリ体型というやつだが、俺よりも年上だし、声色とか性格も落ち着いていて大人だ。体と精神のアンバランスさが非常に魅力的で、学生の間でも人気があるとのこと（ちなみにこれを言っていたのは、同じ学部の男子連中だ）。

「だって、私と風音の最近の会話の内容なんて、八割リューくんの話だよ？」

それはそれは。大人気だな、俺。光栄過ぎて泣けてくる。

「何の話ぃ？」

どうやらサークルの最後の会員が来たようだ。彼女は俺の隣の椅子に座り、会話に混ざってきた。

「向日葵のとこのフランス語、スゴイ延長してたな、講義」

「ホント、とばっちりだよね～。いつもオーバーするんだもん」

「まぁ、高い授業料払って聞いてるんだからな。儲けもんと思っとけよ」

俺の言葉に向日葵はジト目で睨んできた。

「リューちゃん、それ本気で言ってる？」

「当り前だろ」

「それならこの前、私に代返頼んで講義を抜け出したり、講義中に居眠りをするのは授業料の無駄とは言わないのかな？」

「……」

俺は無言でジュースを口に運び、朱里さんの方に向き直った。

「それよりも朱里さん、どうしますか？　今度の温泉合宿。いい温泉がいっぱいで……」

「無視しないでよぉ！！」

無視されるようなことを言うからだっつーの。しかし、相変わらずからかい甲斐があるよな、向日葵は。
俺の隣でうるうるしているのは、蒼井向日葵（あおいひまわり）。俺の小学校時代からの幼馴染で同じ学部の一年生だ。俺と違ってギリギリ合格ではなく、入学式に挨拶をしたくらい成績優秀な学生だ。それでも、どこか天然っぽいからからかい甲斐があるんだよな。それに胸デカイし。
「ふふふ。本当に面白いね、リューくんは。見てて飽きないよ」
朱里さんは俺たちのやり取りを見ながら軽く微笑む。なんというか、反応がいちいち大人だ。容姿と中身のギャップが激しいというか。
俺はそんなことを思いながら朱里さんを見つめる。すると、朱里さんはさらに笑みを深めた。今度は……どことなく意地悪な雰囲気のする笑みで。
「どうしたの？　リューくん。私に夢中になっちゃった？　ついにリューくんもナイチチロリペド野郎になっちゃったのかな？」
すいません。穏やかな笑みを浮かべながら吐くセリフじゃないですよね？
「違いますよ！　しゅりりん先輩！　リューちゃんはちゃんとおっきい胸が大好きな、エッチな男の子なんですぅ！」
向日葵。人前で人の性癖を暴露して楽しいのか？　確かにデカパイは俺の大好物だが……。
とりあえず、後で覚えてろ！　それにさりげなく抱きついてくるな。デカイ胸が背中に当たってドキがムネムネなんだよ！
「あら、ずいぶん楽しそうじゃない？　リューちゃん？」
その時、心臓が凍りつくような感覚に襲われた。
絶対零度の声。こんなことを出来るのはあの人だけだ……！
「か、風音さん……。ご機嫌麗しゅう……」
「うふふ。ご機嫌は最悪よ？　リューちゃん。公共の場でいちゃつく男女を目視してしまったからかしら」
めっちゃ怒ってるな。なんで怒っているのかはよくわからんけど

……。とりあえず謝っとくか？
「風音さん、その……」
「わーい！　リューちゃん私たちカップルに見えてるみたいだよっ！　嬉しいな！」
うおぉぉぉい！！
何言ってくれちゃってんの、この爆乳ＫＹ女！！
「あら？　付き合ってるの、貴方達。とてもお似合いよ？　頭が軽いもの同士仲良くしなさいね」
「そんなわけないですよ！　ったく。それにしても……何をいいだしやがるこの巨乳！」
「ふぇぇ？」
向日葵がビビったように声を上げるが、より強く抱きついてくる。
「はうわぁ！？」
当然、俺のドキがムネムネ率も高くなってしまうわけで……。
「ホント、仲良しね。いっそ清々しすぎて殺したくなるくらいに」
風音さんはかなり苛立っているらしく、笑顔でいながらもこめかみがひくひくと震えていた。やべぇ、スゴイ怖い！
しかし、風音さんは軽く舌打ちすると椅子に座りもせずくるりと回れ右をした。
「朱里、今日は帰るわ。この後すぐに実習があるから」
「はいはい。了解。……もう、素直じゃないなぁ」
朱里さんは、了解の意志を手を挙げながら伝えたが、最後にぼそっと何かを言った。何って言ったんだ？　聞こえんかったし。
風音さんは一度俺に目を合わせると、すぐにフンと反らした。何だろう、俺が悪いのか？
まぁ、でも取り合えず未だに抱きついて勝ち誇った表情をしている向日葵をどうにかしようかね。

あの日以来、風音さんと会う回数がめっきり減ってしまった。会ったときに機嫌を損ねてしまったことを謝ろうと思っていたが、その機会すら与えてもらえなかった。
「まぁ、人文学部と医学部じゃ忙しさはかなり違うからな」
サークルに顔を出さなくなるには仕方ないことだが、キャンパス内でばったり会ったときくらいは挨拶してくれてもいいと思うけどなぁ。
そう感じてしまうのは先日のこと。
学部が違う講義室で講義があったので、同じ講義を履修している向日葵と一緒に移動をしている時だった。
その時に、ばったり風音さんと出くわした。
俺はいつものように挨拶をしようと思ったのだが、俺と向日葵の姿を確認した風音さんは足早に俺たちの隣を歩き去ってしまった。何も言わずに。
「どうして無視すんだろ？」
理由はやはりあの時に事を根にもっているからだろうか？
でも、なんで怒ってしまうんだ？
大したことはしていないだろう？
「わっかんねぇなぁ……」
思わずため息をついてしまう俺。全く風音さんの心の中が読めない。なんで怒っているのか。怒るにしてもなぜ距離をとるのか。
「えいやっ！」
「うわっ！」
急に頬にひんやりとした冷たさが襲ってきた。急なことだったので驚いて情けない声をあげてしまった。何なんだ、一体？
「はろはろ～。リューくん」
俺の頬にコーラの缶を当ててきたのはどうやら朱里さんのようだった。してやったり、と思いっきりドヤ顔をしている。
表情にも腹が立ったが、朱里さんには何だかんだでいつもやられ

っぱなしな気がして、なんか悔しいから俺は憎まれ口を叩いてしまう。
「こんなことで得意げになるなんて子供っすね」
俺の言い分の方がガキ臭かった。
「はいはい。そうですね～。でも、たまにはこうやってからかわないと面白くないでしょう？」
そんなガキ臭い俺を朱里さんは華麗にスルーし、楽しげに笑っている。
あぁ、そんな顔をされるから俺はまだまだ子供なんだな、って余計に思ってしまう。
「それで、どうしたんですか？　何か用でも？」
自分自身に苛立つ俺は朱里さんに当たるように、荒い口調になってしまう。
ホントに子供だな、俺。
「なーんか辛気臭い表情をしている後輩がいましたからね。先輩として相談に乗ってあげようかなって。ほら、ジュース。飲みなよ」
先ほど頬に当ててきたコーラを手渡す朱里さん。それを俺は受け取るが、情けない気持ちでいっぱいだった。表情に出てたのか、情けない。
「表情に感情が出る方がお姉さん的には好感だけどね。何考えてるのか分からないやつよりは楽だもん。風音も私と同じように考えていると思うけどね～」
心を読まれてるのかよ。って、そこじゃない。風音さんも？
「風音さんも？」
「お。風音に食いついてきたね。リューくんが悩んでるのは風音ネタか」
にやりと笑う朱里さん。なんか、俺、いらんこと喋ったみたいだな。でも、もう今更だよなぁ。
ため息をもう一度ついた後に、俺は朱里さんに話すことにした。朱里さんなら悪いようにはしないだろうしな。

「そうですよ。風音さん絡みです」
俺の言葉に、穏やかな表情をしながらも真面目な雰囲気になった朱里さん。それに合わせて俺も口を開いた。
「あのサークルの集まり以来、風音さんが何故か冷たいんですよね。話しかけようにもなんか無視されちゃいますし。風音さんは講義や実習が結構あるから忙しいのは分かるんですが、なんか避けられているような気がするんですよ」
朱里さんは俺の話を聞いた後、何回か首をひねり、何度かうなずいた後に、俺に尋ねてきた。
「風音がリューくんと会って無視された時、なんかあった？」
「いや、俺が風音さんに会ったときは人文の校舎に移動してて、向日葵と一緒だったんですけど」
「それだ。いやぁ、リューくん。リューくんは何と言うか……おバカさんだよね」
苦笑気味に朱里さんは俺をバカと称した。いや、バカなのは否定はしないですけど、俺がバカなのと風音さんが無視することの関連はあるんですか？
俺の考えていることがどうやら俺の表情で分かったらしい朱里さんは、苦笑の色を濃くして言った。
「風音が怒っているのはリューくん自身で気付くことだからあまり教えられないけど、要するに君は間が悪すぎるんだよね。まぁ、向日葵ちゃんがうまいだけなのかもしれないけど」
「向日葵？」
「あぁ、こっちの話。それよりも、リューくんは一回風音と二人きりで会ってみたら？　たぶんそれで解決するんじゃない？」
朱里さんはそう言って、自分の持っていたミルクティーのプルトップを開けて口に運んだ。俺もコーラに手をつける。
案外強めの炭酸に驚きながらも、俺は考える。
二人きりで会うだけで、どうして事態が好転すると朱里さんは思うんだろう？

あの人の普段の行動から察するに、ブランドのバッグでも送らなきゃ機嫌を直してくれなさそうなんだけどなぁ。
「とにかく、連絡とって二人で会って、話してみなよ。案外、簡単なことがこんがらがってるだけだと思うな」
「いや、だからそのこんがらがっているのが何か分からないことには……」
俺の言葉をさえぎるように朱里さんは手で止めた。
そして、ずいぶん落ち着いた声色で、俺に諭すように語りかけた。
「何が問題なのか、そんなのを考えてる時点でダメなんだよ。とにかく突っ走ってみなよ。相手は年上なんだし、多少の暴走は可愛く見えるもんだよ。それにね、私は空回りしたとしてもそれがリューくんなんだし、いいと思うな。そんなリューくんだから風音も……」
朱里さんはそう言ってにっこりとほほ笑んだ。しかし、最後は声が小さくてうまく聞き取れなかった。でも、朱里さんの言葉を聞いて、何故か無性に風音さんと会わなきゃいけないな、と思えてきたのはどうしてだろう。
「分かりました。とりあえず、風音さんに会ってみようと思います。でも、連絡先が……」
「あぁ、それなら……」
朱里さんはバッグから自分の携帯電話を取り出した。
「教えたげる。ほら、赤外線しよ?」
手早く携帯電話を取り出し、連絡先を送ってもらった俺は、挨拶もそこそこにその場を後にして風音さんに連絡することにした。
「リューくんは鈍感だしさ、風音は不器用すぎだよね〜。ま、向日葵ちゃんには悪いけどテコ入れさせてもらうねぇ」
急いでその場を後にした俺には、朱里さんのつぶやきなんて聞こえてなかった。
そして、朱里さんがひどくさみしげな笑みを浮かべていたなんて俺は全く気付くことなんてなかった。

風音さんに連絡を取るべく朱里さんが教えてくれた電話番号を開いてみたのだが、どうしてか発信のボタンが押せなかった。
風音さんのアドレスデータを開くまでは一瞬だったのに、どうしても押すことができないボタン。
手が異常なまでに震えた。
まるで薬をキメたかのように手が震えてボタンがうまく押せないのだ。
「なんで震えてるんだ……？」
そこで分かった。
俺はビビっているんだ。いきなり連絡をしても、風音さんが会ってくれる保証なんてないから。
朱里さんはああ言ったけど、俺は風音さんが俺の事を嫌っているようにしか見えないから堪らなく怖いんだ。
『へたれね』
「は？」
怖くて、どうしようもなくて、何かに押しつぶされそうになっている俺にどこからともなく声が聞こえてきた。
焼きが回って幻聴でも聞こえてきたか？
俺は情けなくなって、思わず薄笑いをこぼしてしまう。
『どうしようもないへたれね。いくつになっても』
「何だよ、それ」
その幻聴は俺を完璧にバカにしていた。普通だったら怒ってもいいほどに見事な罵倒だった。
でも、そんな罵倒が暖かく聞こえるのはどうしてだろう。
「訳わかんねぇ」
でも、その声は懐かしさを感じる声だった。
だからだろうか、俺の心は次第に落ち着いていった。

「手の震えが、止まった」
俺を罵倒する声が消えたと同時に、手の震えはおさまった。そして、俺の心の中を覆っていたはずの恐怖はいつの間にかどこかへ消え去ってしまった。
だから俺は、恐怖が再び俺を覆う前に、発信のボタンを押した。

携帯電話に出た風音さんはひどく不機嫌だった。
『……はい、もしもし？』
「あ、風音さん！　荻条です！」
『何よ、貴方。番号教えた覚えがないんだけど？』
「朱里さんから聞いたんです。えっと、その……。今日、暇な時間とかってありますか？」
『はぁ？　何言ってるの、貴方』
返ってくるのは冷たい声。それでも、俺はめげないように心を強く持って声を紡いでいく。
「風音さんにお話があるんです。大事なお話です、時間、作ってもらえませんか？」
ありったけの真剣な気持ちを込めて俺は電話越しに話す。数刻の沈黙の後、風音さんは口を開いた。
『……いいわ。どこにいるの？』
「へ？」
『会ってあげるわよ。今、どこにいるの？』
「あ、総合教育棟の前です！」
『私は学生ラウンジにいるわ。来られる？』
「分かりました！　行きます！」
『そう、待ってるわ』
電話が切れて、俺は携帯を閉じた。

急ごう。なるべく早く行きたい。あまり待たせたくないし。
軽くかけ足になって向かおうと足に力を入れた時だった。
「そんなに急いでどこに行くの？　リューちゃん？」
ひどく底冷えする声だった。あまりのうすら寒さに驚いて、俺は振り向いた。
そこには、笑っているけど目が笑っていない幼馴染が立っていた。
「いや、別に？」
底知れぬ不気味さを感じたので、話を反らして横切ろうとした俺の腕を向日葵は掴んだ。
そして、にっこりとほほ笑む。でも、目が笑っていなかった。
「それじゃあ、一緒に行ってもいいかなぁ？　別に？　っていうくらいなんだから大した用事じゃないんでしょう？」
「いや、向日葵が一緒だと困るかな」
誰と会うなんて言うのも面倒くさいことになりそうだし、何より今の向日葵は不気味だ。俺は隠す方向で話を進めた。しかし、向日葵はより力を込めて俺の腕を掴んできた。
「！　ッ痛！　向日葵？」
「風音さんのところ、だよね？　何年リューちゃんといると思っているの？　私を舐めてるの？　リューちゃん」
ごまかそうと思ったが、向日葵の真剣な様子に思わず頭を下げてしまう。
「ごめん、そうだよ。でも、向日葵にそれが関係ないだろ？」
その言葉を言った時だった。
心地よい音ともに俺の頬がカッと熱くなった。頬の熱さの上に痛みが襲ってくる。そこでようやく気付いた。
俺は、向日葵に頬を張られたのだと。
「ひ、向日葵？」
どうして殴られたのか皆目見当がつかない俺は、ただ呆然とするしかなかった。
そんな俺を見ながら向日葵は、涙を溜めた目でキッと俺を睨んだ。

「関係ない？　笑わせないで。関係大ありよ。何のためにこの大学に入ったと思っているの？　何のために本当の性格をひた隠して出来た幼馴染を演じていると思っているの？　どうしてこんなにも貴方が好きなのに貴方は気付いてくれないの？　ねぇ、どうして？　どうしてよ！　リューちゃん！！」

「ひま、わり……」

知らなかった。向日葵は、俺のことを好きだったのか？

俺は自分がいかに向日葵のことを傷つけたのかを理解した。向日葵の想いに気付いていなかったとしても、絶対に言ってはならないセリフだった。

「私はね、リューちゃんが好き。好きなのよ！　だから、行かせたくない！　だって、リューちゃんってさ、風音さんばっかなんだもん！　サークルの時もずっと、風音さんを見ててさ！　少しでも私を見てくれたっていいじゃない！！」

「向日葵……」

「ねぇ、風音さんじゃなきゃダメ？　私はいらない？　私はリューちゃんさえいれば何もいらないよ？」

向日葵の想いは真剣だ。それが今になってひしひしと伝わる。

だからこそ俺は、真摯に応えなきゃいけないと思う。

「向日葵、ごめん」

そして、俺は選択した。

「リューちゃん……」

俺の腕をつかむ向日葵の手の力が抜けた。そして、振り返らずにもう一度言う。

「ごめんな、向日葵」

色々な想いは込めたつもりだ。だから、俺は進もう。

風音さんが待ってる……！

「遅かったじゃない」
息を切らせてやってきた俺に、風音さんはそんなことを言ってきた。
なんというか、ひどいなって思った。でも、全然苦じゃない。
知らない間に俺はMになったのかもな。
「これでも急いだんですよ。それでも待たせたことには……、変わりないか……。ごめんなさい」
俺の素直な様子に驚いたのか、風音さんはびっくりしたようだった。
しかし、すぐにいつもの意地悪な表情に戻る。
「今日は素直なのね。いつもそうだといいわね」
風音さんの憎まれ口。何だろう、いつもより嬉しく感じる。
あぁ、そうか。憎まれ口が嬉しい訳じゃないくて、この人と話せていることが嬉しいんだ。
だから、言葉が自然とこぼれていた。本当に自分でも驚いてしまうくらいに自然と。
「きっと、風音さんが好きだから、かもしれないですよね。急いだのも、憎まれ口を聞いても嬉しく思えるのは」
「へ？」
風音さんはひどく間抜けな声を出していた。めったに見ることが出来ない彼女の表情に思わず笑ってしまう。
そんな表情が見たくて俺はもう一度、ありったけの想いをこめて言う。
「気付いたんです。俺、風音さんが好きなんだなぁって。風音さんにシカトされた時はマジでへこんだし、今こうやって話せているだけですごく幸せで……」
言葉の途中だった。
風音さんは思いっきり抱きついてきた。
「へっ？」

今度は俺が驚く番だった。思わず間抜けな声を出したのは仕方ないと思う。
なんで？　どうして？　それだけが俺の頭の中で繰り返される。
「……本当ね。貴方はウソをつかないのね」
「え？」
彼女の言葉の意図がつかめない。足りない脳で考えてみるが、全く分からなかった。
頭をひねる俺に彼女は抱きついたままクスクスと笑った。
「私、バカは嫌いだから。精々あの大学に受かるぐらいにね？」
彼女はとびきりの笑顔で俺に言った。
彼女の言葉、彼女の笑顔、それが俺の中のジグソーパズルをはめていくようだった。そして、今、全てつながった。

『わたし、ばかはきらいだから。せいぜいあのだいがくにうかるぐらいにね？』
『あぁ、それじゃあ、あの大学でまた会おう？　ふーちゃん』

目の前にいる風音さんは、あの時に約束を交わしたふーちゃんなんだ。
今、確信した。
「ふーちゃんだったんですか、風音さん」
「ええ。私はすぐに気付いたのにね。貴方はすっかり忘れていて」
やや頬を膨らませる風音さん。今まで見たことのない、そんな可愛らしい表情。
「ご、ごめんなさい。でも、風音さん、あの時よりすごく成長しましたよね。全然分かりませんよ」
「ええ、再会したら褒めてもらうんだって頑張ったから。そして、貴方もたくましくなって」
風音さんは懐かしそうに俺の頬を手で撫でる。
「そして、同じ大学に入るだけじゃなくて他にも約束を果たしてく

れた」
「他の約束？」
そればっかりは全く分からなかった。大学入学のほかにも約束？
「覚えてないんだ？」
「すいません」
俺が頭を下げると、彼女は苦笑した。
「いいのよ、それなら教えてあげる。貴方が知らない、私と貴方だけの約束」
風音さんは俺の顔に自分の顔を近づけていく。鈍感な俺でも何をするのかが見当がついた。だから、俺は最低限の礼儀として目を閉じる。
唇が重なった。
初めてのキスはレモン味ではなく、彼女が座っている席で湯気を立てているミルクティーの味だった。
長いのか短いのかよくわからない時間が過ぎ、俺と風音さんは唇を離した。
唇を離すとお互い照れたように吹き出してしまった。
だって、風音さんがスゴイ真っ赤になっているから。いつもクールなお嬢様のキャラが台無しだ。そして、俺もたぶん真っ赤だ。だから風音さんが笑っているんだろうし。
「たとえ忘れていても、僕はふーちゃんを好きになるよ」
お互いが落ち着いて、風音さんはそう言った。
「俺がそう言ったんですか？」
「ええ。私がそんな約束覚えていられるわけないじゃない、って言ったら貴方がそう言ったの」
それはずいぶんカッコいいことを言ったな。思わず赤面してしまうな。でも、風音さんの嬉しそうな顔を見る限り受けは悪くなかったみたいだ。
「それなのに、忘れるって言った私が覚えてて、忘れないと言った貴方が忘れているんだもの。うそつき」

「うぅ……。ゴメンなさい」
ぷくっと怒ったように頬を膨らませる風音さんに、俺は小さくなってしまう。
しかし、すぐに、いいんだけどね、と許してくれた。
しばらくして、遠い目をしながら風音さんは口を開いた。
「最初は貴方の言葉を信じていたんだけどね。貴方があまりにも変わらないから。だから、キャラを作っていたの」
「キャラ？」
「そう、キャラ。小さいころの私。冷静だけど、とてもわがままな女の子。その頃の性格に合わせていればもしかしたら、貴方が早く私のことを思い出すかなって」
彼女のカミングアウトでだんだんと彼女のことが分かっていく。
彼女は待っていた。俺を信じて、一心に。
だからこそ、彼女のことが余計に愛おしく思える。
だって、俺のためにずっとキャラを変えて思い出すまで待っていてくれてたんだぜ？
どんだけ愛されてんだよって感じだよな。
だから、俺もその思いに応えなくちゃいけない。
でも、まずは……。
「風音さん、ありがとう」
「へ？」
だって、俺を信じて待っていてくれたんだから。そのことに感謝だ。
「そして、大好きだ」
もう一度言う俺の想い。
そして、今度は俺から。
想いを乗せてキスした。
自分からするキスはひどく恥かしいけれど、俺のありったけの想いが届くと思ったから。
長めのキスの後、彼女は以前のふーちゃんスマイルで言った。

「私、結構嫉妬深いよ。それでも、受け止めてくれる？」
大丈夫。俺も、ふーちゃんのわがままには慣れっこだから。
「当たり前じゃん！」
全部受け止めるよ。貴女が大好きだから。

（後書き）

感想、ご指摘、ご意見を頂けると幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1487w/

流れる日々

2011年8月27日03時27分発行